「個人庭園でありながら宇宙的広がりを持つ造園手法」

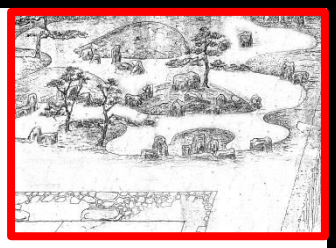
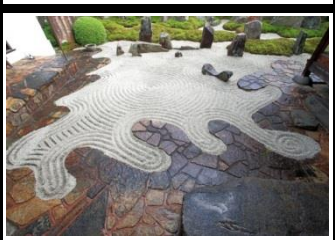
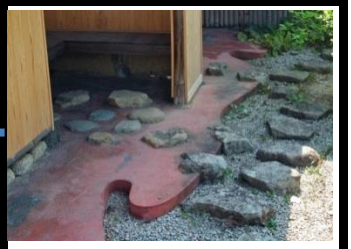
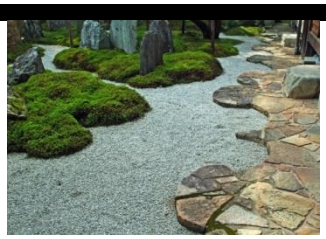
1 個人邸の奥行きのない地形を克服する地割の創造

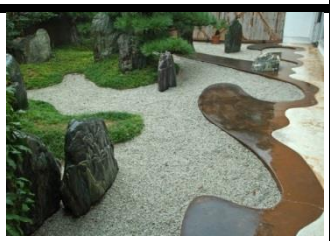
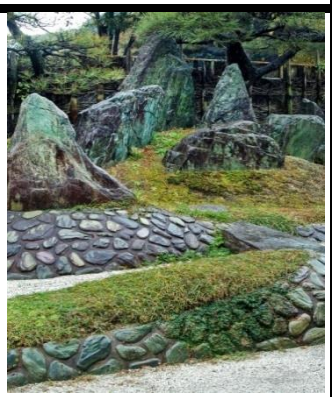
①東福寺本坊の石組みは意味なく石を立てるのではなく、四神仙島に見立てた島に石を組んだ。画期的な創作地割だ。

②東福寺・光明院には枯池に見立てた池泉部護岸に苔地の洲浜を造形した。全く新しい創作地割である。

③村上家庭園は東福寺本坊と光明院の混合系の斬新な地割である。枯池は洲浜で縁どりし、石組みは神仙島に行う。

⑤前垣家庭園の地割は以降の個人邸庭園の基準になった。即ち奥行きの少ない個人住宅の地形に即した基本的な地割となった。この地割の創造により自然を超えた人工造形を得ることになった。以下に前垣家以後の 25 庭を例示する。

時間	神仙島（多島式）へ石組	個人邸の基準地割	枯山水式の洲浜庭園	軒下への洲浜
昭和14	 東福寺本坊（S14）	神仙島への石組と枯池の苔地洲浜との混合系である村上家庭園の誕生	 東福寺・光明院（S14）	
昭和24～29		 村上家（西脇市・S24） 切石は直線で、枯山水の池に苔地の洲浜がある。 枯池に苔地の洲浜があり、切石は直線状のまま		 旧永楽庵（S29 年）：平坦部に切石の洲浜誕生。
昭和30		 前垣家（東広島市 S30） 軒下に洲浜状敷石誕生		 東家（高梁市 S30）：露地に斬新なセメント洲浜誕生
昭和31～32	 増井家（高松市 S31）：棒石と平石で二重洲浜	 瑞応院（大津市 S31）：雲紋模様敷石の原点。	 旧重森家（洲浜は S31）：典型的な神仙島と洲浜敷石	 岡本家（西条市 S32）：洲浜型敷石と抽象石組

昭和32～35	 織田家（西条市 S32） 青い棒石の網代模様	 衣斐家本邸（西宮市 S33 消滅）軒下洲浜と築山石組み	 村上家（六日市町 S34） 洲浜模様の敷石が巡る	 小河家（益田市 S35） 洲浜模様の敷石が巡る
昭和37～40	 臼杵家（高松市 S35）：張石は洲浜模様と壁に	 衣斐家別邸（西宮市 S38） 玄関の洲浜と石組み	 旧有吉家（S39 は泉大津市に移転）	 清原家（芦屋市 S40）：鞍馬石・円石・苔の三重洲浜
昭和40～45	 北野美術館（長野市 S40）：抽象洲浜庭園	 岡本（福山市 S41）：茶室へ向かう両側が洲浜敷石	 久保家（伊丹市 S45） 複沿路を巡りを楽しむ	 田茂井家（京丹後市 S45） 四神仙島と洲浜型敷石
昭和45～47	 深森家（豊中市 S45）：横長の地形に合わせて横長の島と、洲浜型敷石が	 芦田家（兵庫県尼崎市 S46）：三神仙島と軒下にはＬ字型の洲浜。	 志方家（兵庫県神戸市 S47）：極端にデフォルメされたセメントの洲浜	 旧岸本家（現在消失大阪府高槻市 S47）：奥行きのない典型的な民家の庭。
昭和46～50	 小林家（堺市 S46）：青石が葺かれた出島で奥行きを	 福智院（高野町 S49）：三方を囲まれた二重洲浜	 本休寺（兵庫県篠山町 S49）：超横長の洲浜に目が	 松尾大社（京都市 S50）：霊水を流した曲水式洲浜

2 錯覚を利用して奥行きの少なさをカバーする手法

絵画などで用いられてきた手法が庭園でも採用されるケースがある。有名なのは龍安寺の遠近法である。ここでは個人庭園のみでは事例が少ないので、神社仏閣の事例も合わせて例示する。

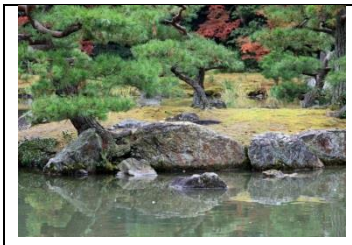
①遠近法

手前に大きな石組を行い、奥に小さな石組をすると錯覚により奥行きのある造形に感じられる。

龍安寺：古庭園の代表例	小倉家（S26）：龍安寺参考	田茂井家（S45）：巨大な三尊	旧重森家（S45）：奇怪な舟石

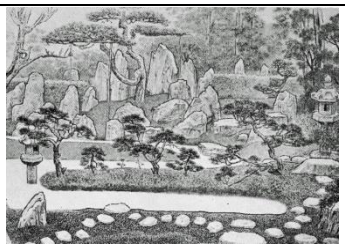
②逆遠近法

さして大きくない石の場合、その石の前に小石を置くと、背後の石は大きく見え、更に造形の厚みが増す効果がある。造園用語では「捨石」と言うが、とんでもないことで、その有効性のため多くの庭で用いられている。

			
金閣寺：捨て石の典型例	福田寺：出島は低く、築山高く	前垣家：小さな石が奥行きを	瑞峯院（S36）：競り上がる造形

③庭園の手前に立石があると、背後の景色が動くように錯覚させる方法

重森は著書の中で斧原家庭園について記している手法である。「南方に高い築山を作り、これに多くの石組を施し、中間の出島は芝生敷きとして、一本一草を植えず、手前の出島には、小松五本を直線状に配して、書院の廊下を歩きながら一覧すると、築山方面の石組や植栽が、一種のリズミカルな動きを見せるのである。そしてこの出島の先に石灯篭を一基配して、出島を更に強調したのであった。」（『日本庭園史体系　No27　現代の庭(一)　』137 頁）と述べている。

			
天龍寺：洲浜を見ながら移動	斧原家（S15）：上記に記載	瑞応院（S31）：観音・勢至菩薩	龍吟庵（S39）：黒雲を伴う龍

④入れ違える洲浜で奥行きを感じさせる方法

古庭園では思い出されないが、重森では奥行を出す手法で一般的に採用されている。

斧原家（S15）：直線の洲浜	前垣家（S30）：起伏の洲浜	小林家（S46）：青石の洲浜	松尾大社（S50）：曲水の洲浜

⑤長さ方向を強調させる方法

この手法は洲浜・曲水などの自然風景を造形化するために東院・苔寺・天龍寺・桂離宮などで採用されている手法であるが、重森もこの手法を踏襲している。

東院（奈良時代・平城京）	西芳寺：苔地の洲浜の岩島	天龍寺：洲浜先端の岩島	桂離宮：栗石洲浜の灯篭
東福寺（S14）：3 本の横石の両端の先に小石がある	瑞峯院（S36）：禅の聖典『碧巌録』の独坐大雄峯をテーマとする。霊山から落ちる激流の先に岩島がある。	北野美術館（S40）：三列の築山の先端に岩島が	松尾大社（S50）：6本の洲浜先端に岩島を配置

3 変形の地形に対応

個人邸における作庭場所の確保は大変である。住宅の南側に面した土地で、しかも奥行きを確保することはほとんど不可能とさえいえる。狭い場所への作庭は不利と言うよりは、逆転の発想で臨めば抽象庭園を生み出すことになる。これぞ重森の真骨頂発揮で、独創性のある芸術性優れた創作庭園を生んだ。

①極小の庭

一般的には坪庭に相当する場所への作庭例を示す。

四方家（S9）：7石・直交線	前垣家（S30）：3 石の抽象石組	清原家（S40）：抽象絵画とも	桑田家（34）：大胆な坪庭

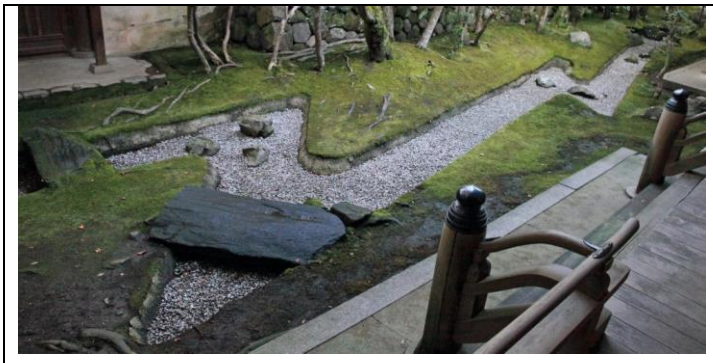
②Single Issue（主体となる造形のみ）

上記の極小の庭と類似の表現であるが、ここでは場所の狭さが問題ではなく、テーマの選択が重要であることを示す。狭い場所に庭をつくる場合、やゝもすれば多くの主張をしようとする。しかし、その方法は逆の効果を生むだけだ。狭いからこそ主張をしたいことを単純にすることで、主張したいことが鮮明になるのである。

斧原家（S15）：洲浜模様の鮮明さ	井上家（S15）：露地の手水鉢に特化	漢陽寺（S44）：地蔵遊戯のテーマのみ

③間口の幅に対して奥行きが極端に浅い地形

個人邸での作庭箇所は以下に例示する。その際に重森は以下のような対応をし、狭さを感じさせない工夫をした。



春日大社(S12):建物と壁の距離は最も狭い場所では約 3m、幅が 20m以上の細長の敷地に遣水の造形を作った。このような超横長の敷地には一つのテーマのみを示した。

岡本家(広島県福山市 S41):門から玄関までの土地に長い洲浜と横長の築山へ石組み。歩きながら鑑賞する庭。

西谷家(岡山県吉備中央町S4):4mに満たない奥行きの敷地に爽やかな庭を創出した。手前には小さな臥せ石のみを散在させ、広がりを感じさせる。

岸本家(大阪府高槻市S47):隣家との塀際に横長の二本の築山を作り、この上に石組みがなされている。一方軒下には美しい形の洲浜の敷石が横長く敷かれ、視線を横へ誘導し、奥行の浅さを感じさせない。

④**廃材利用**:東福寺方丈の庭が勅使門の敷石を再利用したことは有名であるが、重森は臨機応変対応。

東福寺本坊(北庭 S14):勅使門の敷石の再利用

東福寺本坊(東庭 S14):東司の礎石を再利用

石清水八幡宮(S41):昭和 36 年の室戸台風で破壊した大鳥居の残骸を利用した。角柱の破断面は重森好みの造形であり、ほぞ穴さえも作品の造形になったのである。

桑田家(S34):蔵元時代に大戸のレールが敷かれていた 6mもの石が目に留まった。平滑な面を下にして両端を鑿で落とし荒々しい表情にし、更にそれに交差する直線が斬新

4 平坦部での立体造形性の創出により宇宙的な広がりを得る手法

古来雛壇状への石組みをすることで立体造形を作っていたが、重森はそのような作品をほとんど作っていない。山畔に庭園を作ることは場所の確保が困難であるからだ。そこで重森は石組を多層的に配石することで、立体造形の形成を可能にした。平庭に立体造形を作ることはハンデキャップではなくメリットの要素もある。考えてみれば常栄寺・龍安寺は平庭式抽象庭園であるが、違和感もないどころか、この手法こそが個人庭園でありながら宇宙的広がりの造園手法であり、現代我々が求める抽象庭園の手法と考えられる。

① 山畔部への立体造形の事例（古庭園および重森庭園の例）

古庭園の事例は多いが、大半の庭は滝組に限定される。例えば下に示した事例は偶然にもすべて滝である。また、大名庭園の場合は巨大な築山を作って立体造形にしている。小石川後楽園、六義園、岡山後楽園、栗林公園、楽々園など。一方重森は山畔での造園の機会は稀で林昌寺と松尾大社しか思い当たらない。その理由は平坦部に巨大な築山を作って立体造形を作ることは、莫大な経費が掛かるためと、石組み間の有機的な繋がりが確保しにくいためであろう。

西芳寺：階段状地形に合わせ

天龍寺：最古で雛壇状の迫力

保国寺：横石と立石群の均衡

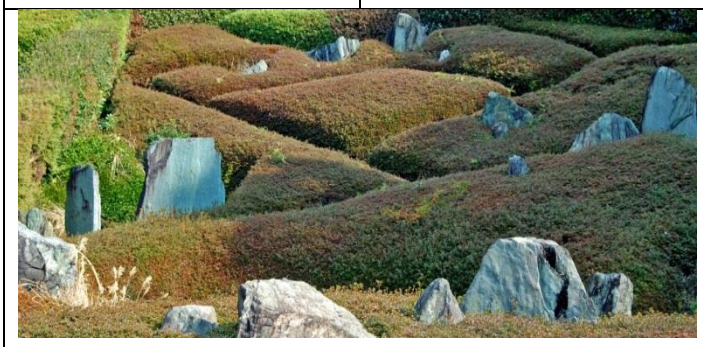
常栄寺：V字型雛壇に徹底性

萬福寺：築山造成で立体造形

青岸寺：最深部には土盛りまで

岡山後楽園：大名庭園代表例

粉河寺：擁壁部へ造園の迫力



林昌寺（泉南市 S36）：重森が自然の山畔に組んだ唯一の例

松尾大社（重森 S50）：緩斜面には土盛りして立体造形確保

② 平坦部での立体造形（古庭園・重森三玲）：傾斜地で水に恵まれた土地は古来より将軍、社寺の庭が造られている。重森の作る事の出来る場所は平坦部しかなかった。しかし、このような場所でも常栄寺や龍安寺は傑出した庭園が出来たのである。ここでは、これら 2 庭の事例を見、その後に重森が平坦部へ作った個人邸庭園の立体造形を例示する。

常栄寺：水墨画の三次元化（遠近法の手法）

龍安寺：さらに削ぎ落とした（抽象化された）石組み群

井上家(15)：露地に多層配石で立体造形形成の成功例

村上家(S24)：平坦部への配石でも立体造形の形成例

小倉家(S26)：故郷の友人宅に重森の龍安寺を作庭

前垣家(S30)：高価な石でなくても立体造形に富んだ石組例

岡本家(S32)：小さな石であるが自由な造形の特徴が

織田家(S32)：巨大な石組みを埋める周辺石組の対比

村上家：(S34)具象的な亀島に対して彫刻的抽象の鶴島

小河家(重森 S35)：巨石群の造形が示す石組みの面白さ

久保家(伊丹市 S45)：正方形の敷地に豪華な石組み点在

芦田家(重森 S46)：三神仙島への石組みの成す立体造形

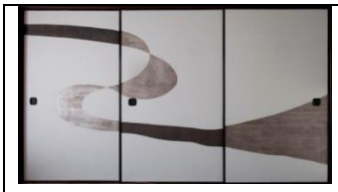
考察)常栄寺・龍安寺の石組と重森の囚われの無い、自由な石組み

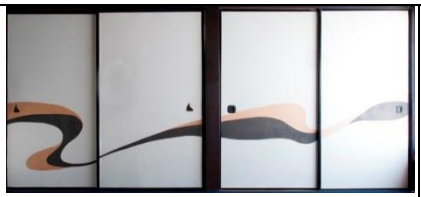
常栄寺・龍安寺こそ重森庭園の原点ではないか。重森に与えられた平坦部での作庭条件は以下のような特長がある。①平坦部への石組みのため、石と石の有機的な繋がりを確保でき、動きのある芸術的な造形になる。②座敷からの座視鑑賞から解放され、移動しながら多視点の造形が楽しめる。③水に頼らない手法のため、護岸工事や防水工事が不要。

5 重森の茶室・書院・露地デザインの推移（やや詳しくは 6 月 28 日のフリートークでお話しいたします）

重森三玲の茶室・書院のデザインは古来のそれとは全く異なり、独創的なデザインに満たされている。重森の庭園と匹敵するとも云える独創的なデザインについて記載したい。代表的なお宅として**増井家（S31）→越智家（S32）→桑田家（S34）→村上家（S34）→小河家（S35）の系譜**で重森がヨーロッパ抽象主義の影響を受けた流麗なデザインを記載する。

①増井家（S31）

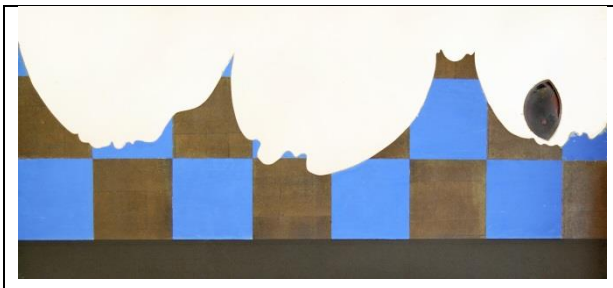




三面の襖絵が関連させているのが重森らしい繊細な感覚

目眩く小宇宙は幻想の世界

②越智家（S32）



牡丹庵に因んだ白牡丹の巨大な花弁（地の活用）

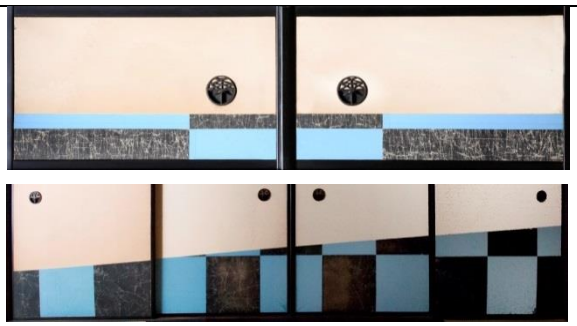
桂離宮「真の飛び石」の影響

イサム・ノグチを越智家に案内

③桑田家（S34）

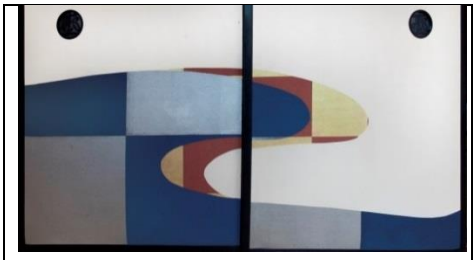
円窓より書院の豊かな空間

流水模様のデザイン



上: 4 枚の小襖の中央 2 枚、下:襖の下部のみ

④村上家（S34）



水屋にある華麗な流水模様

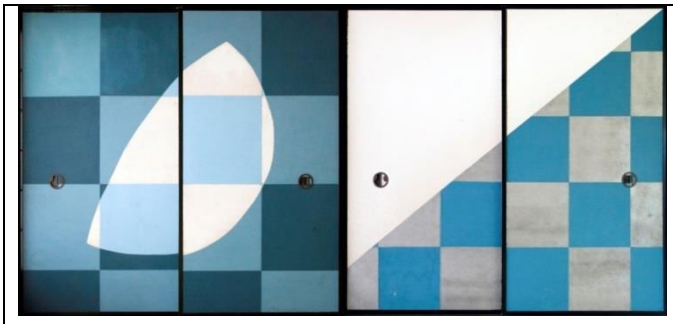
ヨーロッパ抽象絵画を連想させる

板戸にも

市松と月

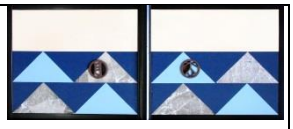
ちぎり絵の意匠

⑤小河家（S35）



書院の 4 枚が連なった襖はまさに巨大な障壁画。

水屋にある絢爛豪華な流水模様



4 枚小襖の中央 2 枚

小河家彫金（各家にも）